

アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現 に関する総合的地域研究

Conflict Resolution and Coexistence through Reassessment
and Utilization of 'African Potentials'

太田 至 (OHTA ITARU)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・教授



研究の概要

現代のアフリカは、紛争によって解体・疲弊した社会秩序をいかに修復・再生させるかという課題に直面している。本研究は、アフリカ人がみずから創造・蓄積し、運用してきた知識や制度（＝潜在力）を解明し、それを人びとの和解や修復のために活用する道を探究することを目的とする。

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：アフリカ、紛争と共生、潜在力、和解と社会的修復、在来の知識や制度

1. 研究開始当初の背景

アフリカでは、とくに1990年代に入ってから大規模な内戦や地域紛争など、多種多様な紛争・もめ事が頻発した。これに対して国際社会は、軍事的介入や停戦・和平協定の締結支援、紛争後の制度構築への協力、国際刑事裁判所などによる司法介入、NGOなどの市民社会による支援といったかたちで関与し、一定の成果をあげてきた。しかし、こうした介入は欧米出自の思想や価値観にもとづくものであり、人々の和解や社会関係の修復には、あまり効果を発揮していない。

2. 研究の目的

本研究は、アフリカ人がみずから創造・蓄積し、運用してきた知識や制度（＝潜在力）を明らかにし、それを人びとの和解、社会関係の修復と共生の実現のために活用する道を探究する。この潜在力は、固有で不変の実体ではなく、西欧近代やアラブ／イスラームといった外部世界からの影響と、つねに衝突や接合を繰り返しながら創出・生成されている。

3. 研究の方法

本研究では、フィールドワークを基礎とした地域研究の方法論によって、以下の課題を明らかにする。(1)紛争・もめ事が発生する機序と実態の解明、(2)アフリカ社会の基礎的な潜在力の同定、(3)外部から移入される要素と在来の潜在力とのインターフェイス機能の解明、(4)アフリカの潜在力を紛争解決と共生の実現のために活用する道の探究。

4. これまでの成果

(1) アフリカでおこっている紛争の実態

現在のアフリカで生起している紛争・もめ事は、国家とローカルな共同体のあいだ、共同体同士、移住民や外国人労働者と地元民のあいだ、国際的な組織・企業とローカルな共同体のあいだなど、複数の主体のあいだで複雑かつ重層的に生起している。そして、こうした主体間に明確な境界線を想定すると、しばしば現実を誤認することになる。非常にローカルな紛争にも、国家や国際関係の動向が、つよく影響している場合もある。また、紛争終結後に被害者の正義をどのように回復し、いかなる賠償を提供できるのかもアフリカ各地でおおきな問題となっている。

(2) 紛争・もめ事を解決し人々の共生を実現するための「アフリカの潜在力」

アフリカの各地には、紛争やもめ事を解決し人々の共生を実現するために自主的に組織・開催される集会がある。それには誰もが参加して活発な議論をかわす。聴衆の情動に訴えるレトリックを駆使した雄弁さと同時に、他者の発言に辛抱づよく耳を傾ける姿勢が高く評価され、しばしば「宗教的な正しさ」も言及される。集会には調停役がおり、人々の創造的な議論を引き出す役を果たす。ねばりづよい折衝のあとで、最後には参加者全員が同意するかたちで集会的な結論が導かれる。この集会は犯罪者の処罰ではなく、争いの当事者相互の癒しと共生、そして共同体の調和の回復に重点をおいている。

本研究では上記の集會に代表される「アフリカの潜在力」の特質として、「語りの力と聴く力」「ねばりづよい折衝」「癒しと共生」「調和の回復」「集合的な判断」の5点を抽出した。

(3) 社会の外部から移入される知識、技術、制度と「アフリカの潜在力」の接合

上記の「アフリカの潜在力」の特徴は、南アフリカの真実和解委員会やルワンダのガチャチャ裁判にも、顕著に発現していた。すなわち「アフリカの潜在力」は、国家や近代的裁判との相互関係のなかでも発揮されている。また、ケニアではイスラム教とキリスト教の聖職者が共同で組織する団体が地域の問題解決にあたり、多様な人々が混住する南アの都市ダーバンでも、人々がもめ事を自主的に解決する組織が報告されている。人々は、ローカル NGO や宗教組織などの現代的な団体を中核としつつ、外来の知識や価値観（西欧やイスラム世界など）と在来のそれとを接合し、みずからの生活世界をより良いものにするための実践をおこなっている。

ただしアフリカでは、上記のような集會を、いかなるコンテキストにも適用可能な技術のようにみなし、その実施を専門家にまかせて大衆を排除するという「アフリカの潜在力」の「技術還元化」と、国家や国際機関による「乗っ取りと盗用」もおこなっている。

(4) 「アフリカの潜在力」という概念の彫琢

「アフリカの潜在力」という概念を彫琢するにあたり、単純な二元論（伝統／近代、特殊／普遍的、西欧／アフリカなど）は無用である。「アフリカの潜在力」を本質化したり、特定の実体をもつものとみなすことはできない。また、現実におこなっている紛争・共生のプロセスは複雑で動的なものであり、それにかかわる主体は重層的な関係をもち、相互に浸透・混合しあう。「伝統」「在来」「エスニック」「共同体」といった概念も、所与のものともみなすことはできず、これらの概念で指示されるものは実際には可変的・状況依存的であり、つねに競合や交渉にさらされている。

歴史的にみて、アフリカでは人々が頻繁な移動を繰り返し、地域社会は異質な外来者を取り込みつつ変容してきた（包摂性と流動性）。また、大多数の人々は隣接民族の言語を理解する多言語話者であり、民族帰属も状況依存的であった（複数性と多重性）。さらにアフリカの人々は、みずからの生活世界をより良いものにするために、外来の知識や価値観を必要に応じて取り入れ、異なるものを接合しつつ新しい知識や制度を創造してきた（混濁性とブリコラージュ）。「アフリカの潜在力」を背後から支える論理として、この三つの特徴を抽出したことは、本研究の重要な到達点である。

5. 今後の計画

- (1) 「全体会議」などで議論を深めるとともに、現地調査による一次資料収集を継続する。
- (2) 国際人類学民族科学連合中間会議など、国際学会における成果発表を継続する。
- (3) 第4回（2014年12月ヤウンデ）、第5回（2015年8月アジスアベバ）「アフリカ紛争・共生フォーラム」を開催する。
- (4) 2015年12月に最終的な成果発表の場として国際シンポジウムを京都で開催する。
- (5) 英文による2冊の成果出版を、2014年8月と2015年3月までにおこなう。
- (6) 和文による5冊の成果出版を、2016年3月までにおこなう。

6. これまでの発表論文等

- ### 論文
1. 遠藤貢、2013「アフリカにおける武力紛争からの脱却への課題」『国際問題』621: 17-27.
 2. 松田素二、2013「地域研究的想像力に向けて—アフリカ潜在力の視点」『学術の動向』7月号: 62-66.
 3. Abe, T. 2012. Reconciliation as Process or Catalyst: Understanding the Concept in a Post-conflict Society. *Comparative Sociology* 11: 785-814.
 4. Oyama, S. 2012. Land Rehabilitation Methods Based on the Refuse Input: Local Practices of Hausa Farmers and Application of Indigenous Knowledge in the Sahelian Niger. *Pedologist* 55 (3) Special Issue: 466-489.
 5. 高橋基樹、2011「開発のための公共性の構築—アフリカ政治経済論の新しい展開に向けて」『国民経済雑誌』203(4): 1-29.

著書

1. 太田至（編）2014『アフリカ紛争・共生データアーカイブ第1巻』111頁、京都大学アフリカ地域研究資料センター。
2. Ohta, I., S. Oyama, T. Sagawa, and Y. Ito (eds.) 2013. *Proceedings of African Potentials 2013: International Symposium on Conflict Resolution and Coexistence*. Center for African Area Studies, Kyoto University. 201 pp.

国際会議

1. Ohta, I. (Organizer) 2013. *Third International Forum on Conflict Resolution and Coexistence Realizing "African Potentials"*. Dec. 6-8, 2013. Juba Grand Hotel, Juba, South Sudan.

ホームページ等

<http://www.africapotential.africa.kyoto-u.ac.jp/>